

4 編年

前節で分析した各部位の属性の組合せと消長から、美濃における一石五輪塔の形態変化の推移を、以下のように4段階に設定した（表3、図21）⁵⁾。

- 1段階 15世紀中葉～後葉
- 2段階 15世紀後葉～16世紀中葉
- 3段階 16世紀後葉
- 4段階 17世紀前葉～後葉

以下、各段階の一石五輪塔について説明する。

(1) 1段階（15世紀中葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔が出現する時期である。埋込式と安置式があり、埋込式は地中に浅く埋めるタイプと深く埋めるタイプの2者があり、地輪幅も一定ではない。また、安置式は縦長であり、一石五輪塔の機能時の正面観は横長である埋込式と異なる。このように、初期段階の地輪は複数の形式や属性が認められる。しかし、水輪の正面観は球形（A類）、その横断面形は円形（a類）、火輪の軒下辺端は反り上がる（A類）など、水輪より上方の形態は類似している。一方、15世紀後葉には水輪の横断面形が隅丸方形（b類）となり、その正面観も最大径が中央よりやや上に位置する球形のものが認められ、水輪の形態は他の部位よりも早く変化している。なお、空風輪まで遺存している資料は少ないものの、文安5（1448）年銘を有する石塔（図21-8）は、風輪の側辺が緩やかに湾曲し、空輪は最大径が中央よりやや上に位置する宝珠形を呈している。

(2) 2段階（15世紀後葉～16世紀中葉）

美濃において、一石五輪塔が拡散する時期である。埋込式が主体であり、柄式は16世紀中葉以降に多くなる。地輪は横長（A類）が多いものの、方形に近い形状となる。水輪は正面観が壺形（B類）のものが出現し、その横断面形は隅丸方形のb類からc類へと変化する。火輪は軒上辺端が三角形状に反り上がり（C類）、屋弛みの属性もa類からb類と変化する。しかし、各属性が変化する時期は一樣ではなく、変化の過程も水輪の正面観のようにA類とB類が混在する時期もある。なお、空風輪は側辺に稜が生じ、空輪は最大径が中央付近にあって下方のくびれが少ない饅頭形のものが出現する（図21-13・33）。

(3) 3段階（16世紀後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が最も多い時期である。2段階までは高さ約40～60cmの一石五輪塔が大半を占めているが、少なくとも3段階にはそれ以外に高さ30cm前後の小型品が出現している。埋込式が主体であるが、柄式の数が増えており、地輪は縦長（B類）が主体となる。水輪は正面観が算盤玉型（C類）、その横断面形は隅丸方形のc類、水輪高と火輪高の比は2類となり、2段階までの様相と大きく変化している。また、火輪も軒上辺端の反り上がりが高くなり（D類）、屋弛みは大半が屈折するb類である。空風輪は扁平化（b類）が進行し、空輪幅が風輪幅よりも明らかに狭いタイプが多くなる。

(4) 4段階（17世紀前葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が激減する時期である。確認できた数は少ないが、安置式が主体であったと考えられ、17世紀前葉には埋込式がわずかに残る。この段階には、地輪のC類や水輪

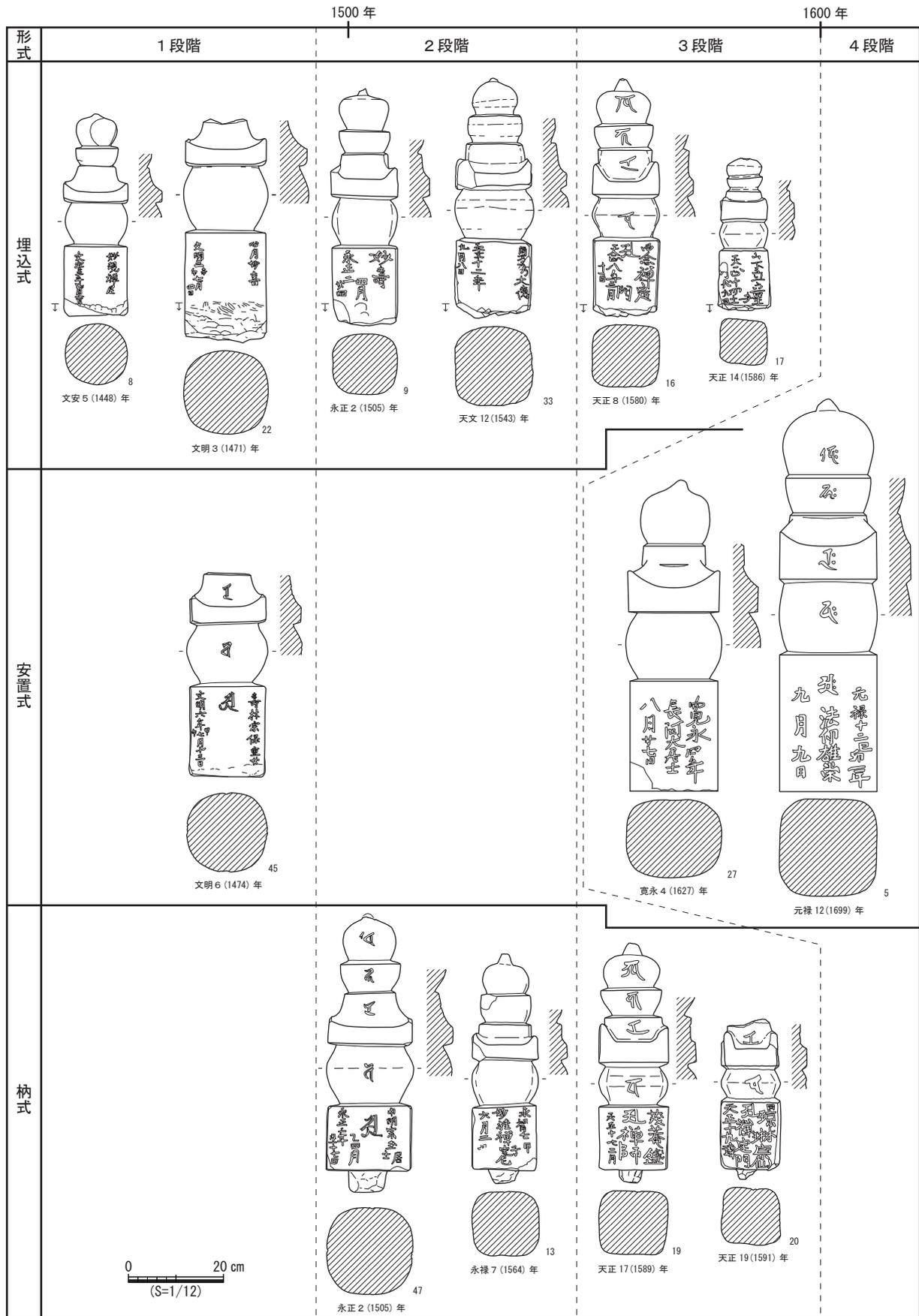


图 21 一石五輪塔編年图

の正面観のD・E類、火輪の軒形態のE類、空風輪のB類など、3段階までに認められない属性が多く出現している。また、3段階において主体的であった水輪の2類や火輪のb類などの属性も、4段階になるとそれぞれ1類やa類へと変化する傾向がある。一石五輪塔全体の大きさをみても、この段階には高さ60cmを超える大型品が出現している。さらに、小稿では属性分類に含めなかったが、地輪の銘文の表記法も3段階までは向かって右側に名前、左側に年月日を刻むものが多い（小野木他2017）が、今回資料を追加して実見した限りでは、4段階の資料には中央に名前、向かって右側に年号、左側に月日を刻むものが多いようである。このように、4段階の一石五輪塔は3段階以前の属性と比較して大きく変化しており、編年上の画期といえる。

5 まとめ

一石五輪塔は、「15世紀に入るところ、おそらく大阪府南部付近をその発生地として、全国に広がっていく」と考えられている（狭川2018）。一方、美濃では少なくとも15世紀後葉頃には一石五輪塔が出現しており、伊勢や三河、遠江、駿河では16世紀に入ってから出現する（竹田2017、松井2017、溝口2017）ことと比較すれば、東海地方においていち早く一石五輪塔が導入された地域といえる。

美濃における15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔は、これまで22地点29基⁶⁾が知られている。市町村別の基数では養老町4、垂井町2、大垣市14（このうち大垣市上石津町2、大垣市墨俣町12）、輪之内町1、瑞穂市2、岐阜市6であり、これらの分布は、およそ垂井町・養老町などの西部域と大垣市墨俣町・岐阜市などの東部域に分かれる（図22）。

このうち、西部域の寺院には、開山・開基に近江の僧侶が関係している宝聚院と天喜寺が含まれている。宝聚院は近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基し、その4年後にあたる文安5（1448）年の年号を有する一石五輪塔が造立されており、これが美濃の一石五輪塔では最古の年号を有するものである点は注目できよう。宝聚院の一石五輪塔は文安5年以降、永正2（1505）年まで年号の刻まれたものが確認できないが、宝聚院から南東へ約3km離れた天喜寺には文明3（1471）年銘の一石五輪塔が存在している。また、同じく西部域の浄誓寺も明應4（1495）年に改宗し、その2年後にあたる明應丁巳（1497年）の銘を有する一石五輪塔が造立されており、宝聚院と同様に寺院の開基や改宗の数年後の年号が刻まれた一石五輪塔が造立されている。また、浄誓寺には、一石で造られた大型の五輪塔がある（図13-40）。これは、地輪下方を深く埋め込むもので、形態的に一石五輪塔が美濃に伝えられた頃の造立と考えられ、近江でも散見できる。このように、美濃の一石五輪塔の導入の経緯は、寺院の開基や改宗を契機に、石塔に関する新しい情報が近江を含む他地域から波及したことが一因としてあったと考えられる。

一方、東部域の一石五輪塔は大垣市墨俣町、輪之内町、瑞穂市などの長良川流域に集中しており、特に大垣市墨俣町所在の明台寺には、15世紀代の

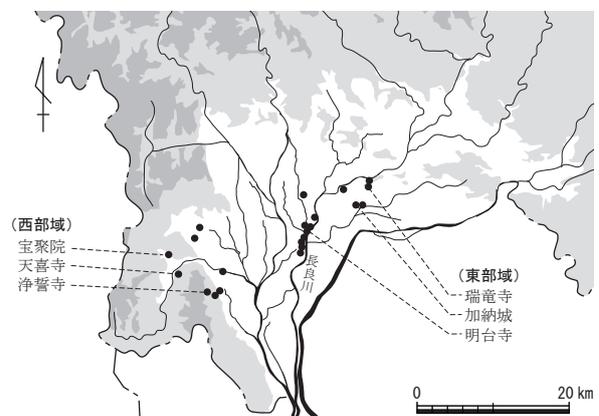


図22 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の分布

年号が刻まれた一石五輪塔が6基もある。そのうち3基は美濃守護代斎藤利藤との関連が指摘され(横山1996)、1基は斎藤利為の法名が刻まれている(図15-47)。また、大垣市墨俣町は室町時代以前の主要街道である鎌倉街道の宿場町があったとされ、当地は長良川の渡河地点でもあり、交通の要衝であった。さらに、その上流の岐阜市域でも加納城跡や瑞龍寺などで15世紀代の一石五輪塔が確認でき、いずれも15世紀中葉から末葉にかけて成立したとされている(内堀・三宅2004)。このように、当時の長良川流域は政治・経済・文化の中心的な場であり、多くの人々が往来し、様々な情報が行き交っていたと考えられ、その拠点施設や関連施設において、いち早く一石五輪塔の情報がもたらされたと考えられる。

また、美濃における1段階の一石五輪塔は埋込式と安置式があり、前者は西部域の垂井町・養老町などに多く、後者は東部域の大垣市墨俣町・岐阜市などで確認できる。小稿では、東部域の一石五輪塔を十分に図示できなかったが、岐阜市における1段階の一石五輪塔のうち、瑞竜寺天澤院・臥雲院や法円寺のものは安置式で、地輪が縦長である。また、瑞竜寺天澤院のものは四方梵字が刻まれ(写真4)、大垣市墨俣町の明台寺一石五輪塔(図15-45・46)と類似している。このように、1段階には2つの地域で異なる形式の一石五輪塔がほぼ同時期に伝えられ、限られた階層の人々に受け入れられた可能性が指摘でき、2段階には埋込式が普及し、安置式は淘汰されていったと考えられる。

次に東海地方に目を向けてみると、初期の一石五輪塔は、美濃、伊勢、三河の各地域において、いずれも水輪の横断面形が円形を呈している点が共通している。これは、すでに多くの研究者が指摘するように、一石五輪塔が各地の組合せ式五輪塔を模倣して成立したことに起因すると考えられ、成立時期が異なっても、同じ属性を有している点が特徴といえる。しかし、美濃における3段階の水輪の算盤玉形を呈する正面観やその扁平化、火輪の軒上辺端の反り上がりの高さなどの属性は、伊勢や三河の一石五輪塔では少なく、東海地方においては特徴的な形態といえる。さらに、この段階は一石五輪塔の造立数が増え、小型品も造られ、幅に対して奥行が短い扁平な一石五輪塔も散見できる。このように一石五輪塔の製作数の増加とともに、その造立階層が下層へと広がり、それとともに形態の在地化が進行していったと理解したい。

ところが4段階になると、一石五輪塔の造立数が激減し、美濃ではそれまでとは大きく異なる形態の一石五輪塔が出現する。さらに、美濃、伊勢、三河、遠江、駿河などの各地域で、地輪の長足化や風輪の扁平化、空輪の肥大化などの属性が確認でき、旧国を超えた石塔の斉一化を垣間見ることができる。しかし、写真5のように小型品も少なからず継続して造立されており、水輪の正面観が算盤玉形を呈するものも確認できる(図



写真4 瑞竜寺天澤院石塔



写真5 妙応寺石塔群

4-2) ことから、4段階の一石五輪塔は3段階の中世的な要素を部分的に残しつつ、他地域の影響を受けた石塔へと変化していったと考える。

おわりに

小稿では、美濃における一石五輪塔の分布と編年について検討した。今回は一石五輪塔の観察に基づく考古学的な研究方法に終始したが、一石五輪塔に限らず、石塔の分布や形態変化の要因については、宗教的・社会的・政治的な時代背景を考慮し、様々な研究分野からの検証を経た慎重な議論が不可欠であり、そのためには今後も継続した基礎的なデータの作成と蓄積が必要であると考えます。

なお、小稿の執筆に際し、下記の方々からご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

狭川真一、佐藤亜聖、鈴木元、高田康成、竹田憲治、富田真一郎、中島和哉、廣瀬正嗣、松井一明、溝口彰啓、山路裕樹、瑞龍寺天澤院、浄誓寺、大通寺、天喜寺、宝聚院、明台寺

注

- 1) 図1のドット数は、平成30年10月までに筆者が一石五輪塔を確認した228箇所の所在地を示す。しかし、美濃のすべてを調査した訳ではなく、調査を進めればその数はさらに増える。
- 2) 石材が特定できないものは、一石五輪塔を実見しても判断できなかったものと、文献等に掲載された写真から石材を推定できなかったものがある。前者は関ヶ原町妙応寺の石塔、後者は揖斐郡揖斐川町の揖斐川上流域(旧徳山村)の石塔群である(岐阜県教育委員会1985)。
- 3) 銘文は、以下のとおり記載した。
 /改行、□□□欠損文字のうち字数が推定できるもの、[] 欠損文字のうち字数が推定できないもの。
- 4) 製作時の加工痕の呼称は、既存の分類(小野木2015)による。
- 5) ただし、17世紀第一四半期の年号を有する一石五輪塔は数が極めて少なく、3段階から4段階への移行期については、もう少し検討が必要である。
- 6) 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の基数は、既存の研究(横山1996)に筆者が実見したものを追加した数である。

引用・参考文献

- 内堀信雄・三宅唯美 2004 「土岐氏と道三・信長の城下町—東海の首都“革手”から天下布武の本拠“岐阜”へ—」『守護所・戦国城下町を考える』守護所シンポジウム@岐阜研究会
- 小野木学 2012 「東海<美濃>」『中世石塔の考古学—五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布—』高志書院
- 小野木学 2015 「五輪塔(火輪)の製作工程の検討」『岐阜県文化財保護センター 研究紀要』第1号
- 小野木学・中谷正和・竹谷充生 2017 「美濃の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』第9回 中世葬送墓制研究会資料
- 上石津町教育委員会 2004 『新修上石津町史』
- (財)元興寺文化財研究所 1982 『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』
- 北野隆亮 2017 「紀伊の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』第9回 中

世葬送墓制研究会資料

- 岐阜県企画部土地対策課 1986『岐阜県土地分類基本調査「彦根東部」、「津島」、「桑名」』
- 岐阜県企画部土地対策課 1995『岐阜県土地分類基本調査「横山」』
- 岐阜県教育委員会 1985『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区 埋蔵文化財分布調査報告書』
- 国土庁土地局 1975『土地分類図（岐阜県）』
- 狭川真一 2003「戦国時代における墓地の様相」『戦国時代の考古学』高志書院
- 狭川真一 2018「中世武士の墓と近世大名墓」『第10回大名墓研究会～近世大名墓研究の到達点～』大名墓研究会
- 墨俣町役場 1956『墨俣町史』
- 関ヶ原町 1992『関ヶ原町史 通史編別巻』
- 竹田憲治 2017「伊勢・志摩・伊賀の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』
中世葬送墓制研究会
- 中世葬送墓制研究会日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 松井一明 2017「三河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会
- 松井一明・溝口彰啓 2010「第5章 石造物調査1 市域の中世石塔（1）」『岩村城跡基礎調査報告書』I 恵那市教育委員会
- 松井一明・溝口彰啓 2019「第2章 石造物調査2・3 —恵那市域の中世石塔（2）・（3）—」『恵那市遺跡詳細分布調査報告書』恵那市教育委員会
- 溝口彰啓 2017「遠江・駿河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会
- 横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所
- 養老町 1978『養老町史 通史編下巻』